愛知淑徳大学論集－文学部篇－　第45号　2020.3　67-79

伝統的な祭事の新たな試み
―石取祭の継承と非認知能力の開発―

A New Attempt of Traditional　Festivals：Succession of Ishidori Matsuri　and Development of the Non-cognitive Ability

佐　藤　実　芳
SATO Miyoshi

キーワード：非認知的能力の開発、西鍋屋町石取祭継承会、伝統と文化の継承

はじめに

2016年12月1日、日本が誇る祭礼「山・鉾・屋台行事」がユネスコ無形文化遺産に登録された。登録されたのは、古くから伝承され、地元の人々から大切にされている東北から九州まで18府県33件の祭で、既に2009年9月に登録済みの「京都祇園祭の山鉾行事」と「日立風流物」も含まれている。

「山･鉾･屋台行事」は各々の地域の文化の粋が結集されており、その地域の住民が一体となって行う伝統的な祭である。しかし地域によっては、少子高齢化の進行とともに、祭への参加者が減少し、その継続が危ぶまれている。

その一つである三重県桑名市の石取祭は、江戸時代初期に始まった祭事で、天下の奇祭とも、日本で最もやかましい祭とも言われている。拙稿「伝統的祭事の未来　― 桑名の石取祭を例に ―」[1)]では、参加する子ども及び若者が減少して祭事の維持が困難な状況になりつつある状況を打破するために始まった西鍋屋町石取祭継承会の取組を取り上げた。同町の場合、町内在住の少年会（中学校3年生までの男女）の会員が極めて少数という状況のため、石取祭に参加していない町の子どもが入会することができる新しい「少年会」のシステム化を、2018年に始めた。

2019年の石取祭では、西鍋屋町が新しい「少年会」の2回目の取組を実施し、発展的な成功を収めることができた。本稿では、教育学の視点からその取組について検討し、伝統的な祭事をシステム化することによるその現代化、及び祭事が子どもに与える教育的意義について考察する。

1．西鍋屋町石取祭継承会

2018年の「少年会」の活動を分析して、2019年に改善又は変更された点は、以下の2点である。

①　鼓鉦練習会の開催

2018年の活動は、石取祭ばやし優勝大会（俗称石取コンクール）の為の正式な練習期間から開始した。西鍋屋町に生まれ育った子どもは、幼い頃から鉦を摺り、太鼓を叩く練習をしているが、在住していない子ども達が短期間で鉦の摺り方や太鼓の叩き方を覚えるのは容易なことではない。

そこで2019年は、5月から毎週日曜日の午後に希望者を対象に鼓鉦練習会を開催して、少年会会員の鼓鉦演奏の技術向上を目指して練習した。講習会では、町内の中高年者が中心となって、子ども達に丁寧に鉦の摺り方と太鼓の叩き方を指導した。鼓鉦練習会を開催することにより、会員の鼓鉦の奏で方が上達すると共に、世代を超えた交流が長期間に渡って実現することができた。

②　少年会の会員への「入会説明会」及び「オリエンテーション」

2018年は、少年会への新入会員が多数になることを想定して、希望者全員を対象とした「入会説明会」及び「オリエンテーション」が実施された。しかし2019年は、新入会員の数が昨年ほど多人数にはならないことが予想されたため、入会希望者及び新入会員に個別に説明がなされた。

「入会説明会」では、祭の概要や具体的な少年会の活動について説明がされた。石取祭には様々なしきたりがあり、石取祭特有の用語がある。西鍋屋町の住人には、当然の如く理解されている言葉が、住人以外の人には理解しがたいことが多い。そのため、新たに石取祭に関する「用語集」を作成し、保護者に理解してもらう工夫がなされた。その結果2019年は、桑名市在住の子ども達を中心に、8名（小学2年生～中学1年生）が新規会員として少年会に入会した。

7月には、「オリエンテーション」を開催して、新体制の少年会の運営が円滑にできるように、町内在住の子どもが中心であった従来の少年会からの変更点について周知徹底がなされた。

2．石取祭ばやし優勝大会（俗称石取コンクール）への参加

2018年は、町内に在住しない子ども達が鼓鉦を奏でる練習をする準備期間が十分ではなかったため、西鍋屋町は、子供の部で石取祭ばやし優勝大会に参加することが出来なかった。ところが2019年には、5月から鼓鉦練習会を開催することにより、少年会の会員の鼓鉦を奏でる技術も向上し、石取祭ばやし優勝大会子供の部に出場することができた。しかも出場した21チーム中5位を意味する上田染工敢闘賞に輝いた。

石取祭ばやし優勝大会参加チームは、年齢等を考慮したうえで、コンクール出場の意志のある会員で構成し、その会員に対しては通常の練習に加えてコンクール対策の指導も実施された。コンクールに出場する会員は自主的に練習に参加していたことから、コンクールに出場することができること自体が、会員には喜びであったと考えらえる。更に5位（上田染工敢闘賞）入賞は、チームのパフォーマンスに関する技能・音量・態度が評価されたということである。コンクール出場のために練習を重ねた会員には、自らの努力が報われたという達成感を得ることができたであろう。また、出場した会員は、コンクール出場の為の特別練習を通して、チーム

ワークが深まったと考えられる。

2019 年の 5 位入賞の経験から、少年会の会員の多くが今後コンクールへの出場、さらに上位の入賞をも目指して、自ら鼓鉦を奏でる技量の上達のために練習に励み、少年会全体のチームワークも深まるのではないかと期待する。

3．2019 年石取祭のスケジュール

西鍋屋町少年会の活動は、以下の予定で進められた。

8 月 2 日（金）

10 時　石取祭の期間、少年会の居場所となる「少年会宿」作り及び鉦磨き

12 時～ 12 時 30 分　昼食懇談会

12 時 30 分　解散

16 時～ 17 時 30 分　1 回目の「お勝つぁん」

17 時 30 分　夕食懇談会

18 時 30 分～ 19 時 45 分　着替え（男女別更衣室又は自宅）

19 時 45 分～ 20 時 30 分　2 回目の「お勝つぁん」

20 時 30 分　解散（少年会の活動終了）

＊　各保護者の引率により、会員は以下の祭事に参加できる。

23 時 10 分　西鍋屋町より祭車曳き出し

23 時 40 分　掛樋地内に第 9 組の祭車整列

午前 0 時　叩き出し：第 9 組各町を、鼓鉦を奏でながら練り歩く。
（少年会員も、参加可能）

午前 4 時頃　西鍋屋町地内で解散（終了）

8 月 3 日（土）試楽（しんがく）

16 時　少年会宿に集合

16 時 10 分～ 19 時頃　祭車を曳き出し、少年会が鼓鉦を奏でながら第 9 組内を練り歩く。19 時頃に少年会宿前で「青年会」（20 歳～ 40 歳の男性）と「藤姫会」（20 歳以上の女性）と合流し、鼓鉦の担当を交代する。

19 時 20 分　少年会宿で弁当の配布（少年会の活動終了）

＊　解散後 20 時までは、少年会宿での飲食が可能である。

＊　19 時 20 分以後は、保護者の引率により引き続き参加は可能である。

午前 0 時頃　西鍋屋町地内で解散（終了）

本楽叩き出し

午前 1 時 30 分　祭車を曳き出して、国道 1 号線に第 9 組の祭車が整列する。

午前 2 時　叩き出し

午前2時40分頃　西鍋屋町地内で解散（終了）

8月4日（日）本楽（ほんがく）

12時10分　少年会宿に集合

12時20分～15時頃　祭車を曳き出し、旧東海道を経由して整列場所まで送り届ける。整列場所に到着するまでの休憩時間以外は、基本的に少年会が鼓鉦を休憩なしに奏でる。

15時～16時30分　立宿での夕食と休憩

16時30分～18時頃　少年会が鼓鉦を奏でながら、桑名宗社に進み、「藤姫会」が合流する17時30分頃から「青年会」が合流する18時30分頃までの間に、少年係が保護者を確認して「流れ解散」する。（少年会の活動終了）

＊　保護者の引率により、渡祭を経て山蔵に帰着するまで参加は可能である。一部の時間を除き、少年会の会員も鼓鉦を奏でることができる。

20時54分～21時2分　渡祭

午前1時45分頃　西鍋屋町地内解散

8月5日（月）　山卸（やまおろ）し（後片付け）

10時　少年会宿に集合

10時～13時　少年会宿と町内各所に立てられた笹の後片付けをする。

12時～12時30分　昼食懇談会

12時30分　解散（終了）

2018年と2019年との違いは、本楽の祭車の整列場所である。石取祭の本楽は、予め決められた順に祭車が整列して、花車と呼ばれる最初の祭車を先頭に、18時30分から順に渡祭する。渡祭とは、祭車が神職と神社役員の待つ春日神社前に進み番号札を神職に渡して、鼓鉦を打ち鳴らして参拝してお祓いを受けて退出するという儀式である。

少年会の役割は、昼頃に祭車を曳き出して、町内を練り歩くという「町練り」をした後、祭車を所定の位置に送り届ける間、鼓鉦を奏でることである。その整列方法が隔年で異なり、北並び（八間通）と南並び（旧東海道）とがあり、整列場所は渡祭の順番により決まる。

2018年は、南並びの渡祭順が9番ということで、整列場所が西鍋屋町からそれほど遠い距離ではない新町であった。そこで出発時間も13時10分に設定されており、かなり余裕があるものであった。ところが2019年は北並びの渡祭順が19番ということで、整列場所の八間通まで西鍋屋町から3km以上[2)]の距離があった。予定では12時20分に祭車を曳き出し、「町練り」をした後、12時50分頃から西鍋屋町を離れ、14時30頃に整列場所に到着の予定であった。

4．熱中症対策

石取祭は8月の第一日曜日を本楽として開催される。桑名市は、2018年1月1日～12月31日までの最高気温では全国16位の39.8℃（8月3日）を記録し、日平均気温の最高では全国10位の33.0℃を記録するほど暑い[3)]場所である。ちなみに2018年8月1日～8日までの、最高気温と降水量は以下の通りであった。

表1：桑名市の最高気温と降水量（2018年8月1日～8日）

	1日	2日	3日	4日	5日	6日	7日	8日
最高気温（℃）	34.2	39.6	39.8	34.3	37.4	38.4	31.3	36.4
降水量（mm）	0	0	0	0	0	0	7	0

国土交通省　気象庁「過去の気象データ検索：桑名市　2018年8月」
http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/view/daily_a1.php?prec_no=53&block_no=0500&year=2018&month=8&day=&view=h0　（2019年12月1日入手）より作成。

2018年の石取祭は、8月3日が「お勝つぁん」、4日が試楽、5日が本楽であった。3日は、最高気温が39.8℃で、第1回目の「お勝つぁん」を始める16時は、まだ36.9℃[4)]とかなり暑かった。また、本楽の日は、整列場所に到着するまでは35℃代（12時：34.5℃　13時：35.2℃、14時35.5℃　15時：36.0℃）であったが、17時には最高気温が37.3℃になった[5)]。

伝統的な祭事とはいえ、危険を伴う猛暑の中での少年会の活動は避けなければならない。特に子どもは、成人のように自ら体調管理をすることが難しい。しかも、少年会の活動は、日中の活動が中心になるため、猛暑の影響を受ける可能性が高い。子ども育成係兼少年係長を務める入山史郎及び子ども育成係兼少年係の上田周平の連名で、7月27日付「石取祭の運営における熱中症対策、特に子どもに対する熱中症対策の必要性について（ご提案）」が、西鍋屋町自治会長 森孝之、西鍋屋町理事長 佐藤光則、西鍋屋町自治会 関係各位宛に提出された。対策として、「予防のための万全の対策」と「早期の適切な応急手当」の両面が検討された。

＜予防のための万全の対策＞

環境省の熱中症予防情報サイトの「夏季のイベントにおける熱中症対策ガイドライン2019」等の情報及び公益財団法人日本スポーツ協会「スポーツ活動中の熱中症予防ガイドブック」を参考に、「暑さ指数（WBGT）」[6)]に基づき、少年会の活動方針を定めた。公益財団法人日本スポーツ協会「スポーツ医・科学研究　熱中症予防のための運動指針」では、WBGT21℃まで（湿球温度18℃まで、乾球温度24℃まで）は「ほぼ安全」、WBGT21℃～25℃（湿球温度18℃～21℃、乾球温度24℃～28℃）は「注意（積極的に水分補給）」、WBGT25℃～28℃（湿球温度21℃～24℃、乾球温度28℃～31℃）は「警戒（積極的に休憩）」、WBGT28℃～31℃（湿球温度24℃～27℃、乾球温度31℃～35℃）は「厳重警戒（厳しい運動は中止）」、WBGT31℃～（湿球温度27℃～、乾球温度35℃～）は「運動は中止」とされている。この基準に基づき、予め

以下のような熱中症予防対策を講じた。

・WBGT が 31℃以上の場合、子どもの活動を中止する。
・祭車運行時刻を柔軟に変更する。
・運行時の祭車の停止位置を、天幕周辺が日陰になるよう最大限の配慮を行う。
・鉦を 2 丁にする。
・参加者全員に、熱中症への注意を喚起する他、子ども達の健康状態を気にかけていただくようお願いする。
・塩分補給タブレットを購入、携行し、随時配給する。
・熱中症発症時の病院への移送について計画を立てておく。
・鉢巻を帽子状に着用することや、目立たない箇所への保冷グッズの活用（半纏の襟裏や鯉口シャツに貼り付けるタイプなど)、手拭い等を使って保冷剤を首に巻くことなどの対策を保護者に紹介し、活用を奨励する。

そして、WBGT 別の対応策を、予め決めておいた。

＜1 回目の「お勝つぁん」＞

WBGT が 31℃以上の場合は、30 分刻みで集合時刻を遅らせる。17 時になっても WBGT が 31℃以上の場合は、中止する。

＜試楽の祭車の曳き出し＞

WBGT が 31℃以上の場合は、祭事長の判断で WBGT が 31℃未満になるまで祭車の曳き出しの時刻を遅らせる。17 時 30 分の東鍋屋町地内の整列時刻まで WBGT が 31℃以上の場合は、少年会の会員は自宅又は少年会宿で待機し、祭車のみ移動させる。

WBGT が 28℃～ 31℃の場合は、予定通り祭車を曳き出すが、鉦を 2 丁にし、祭車の停止位置を可能な限り日陰になるようにする。

＜本楽の曳き出し＞

WBGT が 31℃以上の場合は、祭事長の判断で町練りを割愛し、祭車の曳き出しの時刻を遅らせる。12 時 50 分の東鍋屋町地内の整列時刻まで WBGT が 31℃以上の場合は、少年会の会員は自宅又は少年会宿で待機し、祭車のみ移動させる。その間に WBGT が 28℃～ 31℃の場合は、自宅待機の会員は保護者が、少年会宿待機の会員は少年係が自動車で会員を祭車まで送り届ける。整列場所で合流することができなかった場合には、16 時 30 分までに立宿に移動する。

＜本楽の 16 時 30 分～＞

WBGT が 31℃以上の場合は、少年会の会員は自宅又は立宿で待機し、祭車のみ運行する。WBGT が 31℃未満になった段階で、自宅待機の会員は保護者が、立宿待機の会員は少年係が徒歩で祭車まで送り届ける。

表２：桑名市の最高気温と降水量（2019 年８月１日～８日）

	１日	２日	３日	４日	５日	６日	７日	８日
最高気温（℃）	36.3	34.8	34.4	34.2	35.5	33.2	34.4	34.0
降水量（mm）	0	0	0	0	0	0	0	0

国土交通省　気象庁「過去の気象データ検索：桑名市　2019 年８月」
http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/view/daily_a1.php?prec_no=53&block_no=0500&year=2019&month=08&day=&view=h0（2019 年 12 月１日入手）より作成。

2018 年に比べて、2019 年の石取祭開催日の最高気温は、高くなかった（表１・２参照）。それでも WBGT 計の測定では、暑さ指数は高く、石取祭は猛暑の中での開催となった。

８月２日の１回目の「お勝つぁん」は、暑さ指数の基準に基づき、17 時まで出発を遅らせた。８月４日の本楽の「整列に向かう送り」時間帯のほとんどが「厳重警戒」を示す暑さ指数であったので、少年会の集合時刻を遅らせ、鉦は２丁にして町練りを短縮するという措置が取られた。一時的に「危険」を示す暑さ指数を超えたが、タイミングよく祭車の運行の休憩時間と重なり、水分補給、日陰での休憩、首に巻いた保冷剤の交換等を行うことができたのは幸いであった。

熱中症対策の救急用品、飲料水等運搬用車台を準備し、祭車運行中は常に少年係が少年会の活動場所である祭車の天幕付近の WBGT の測定をしていた。少年会の会員自身、太鼓を叩いた後に鉦を摺り、水分補給してから太鼓の列に並ぶことで熱中症を予防した。また、休憩時には、アイスクリームなどを会員に配り、水分と共にエネルギーの補給を十分に行った。

現在の少年会は、小学校２年生までは保護者の責任で参加することになっており、保護者に注意喚起をすることで、熱中症対策が可能である。しかし、小学校３年生以上の会員に対しては子ども育成係が責任を負うことになっており、熱中症対策にも全責任があった。尚、熱中症対策に関しては、少年会会員の LINE グループトークで、逐次保護者に連絡をしていた。スマートフォンが普及している今日だからこそ、このような万全の対策が可能であったともいえる。

少年会の熱中症対策は、町内会の役員等も情報を共有し、子どもだけでなく大人も含めて「1人も熱中症患者を出さない」ことが町内をあげた目標となったという。町内全体に受け入れられる程の綿密な熱中症対策を作成したことは、画期的であり、2019 年の少年会の活動の成果の一つといえる。

５．ボランティアの導入の可能性

少年会の会員が今後更に増加することが期待される。その場合、少年会担当者の負担が課題になると考えらえる。特に 2019 年のように、本楽の並び方により祭車の整列場所が西鍋屋町から遠い場所になった場合、熱中症等の危険性が高くなる。そこで、将来小学校の教員を目指す３人の大学生に、石取祭の本楽について、西鍋屋町から整列場所までの少年会の活動を見学

してもらった。その結果、以下のような課題があることが明らかになった。

① ボランティアを最も必要とするのが本楽であるが、事前に石取祭についての学習等が必要である。本楽だけの参加では少年会の活動の支援を十分にすることができない。

② 子ども達の安全に係る為、子どもに関する知識があり、責任感の強い学生ボランティアが必要である。誰でもできるボランティアではないので、募集方法が難しい。

③ 石取祭の日程が、大学の前期定期試験期間に重なる可能性が高いため、ボランティアを早期に確保することが難しい。

6．石取祭の特徴

石取祭は、日本で最もやかましい祭とされる奇祭である。しかし、単に鼓鉦を奏でる音がやかましいというだけではなく、特別に盛り上がるクライマックスの瞬間がある。それが、叩き出しと渡祭である。

叩き出しは、試楽の日の午前零時に、各町の青年会が一斉に鼓鉦を打ち鳴らす、石取祭の開始の儀式である。午前零時までは、一切鼓鉦の音を出すことが許されない。上端の万燈一つだけに灯りを入れた祭車が、町の人に見守られて整列場所に送られ、その後祭車の提灯に灯がともされて午前零時を待つ。そして宿で酒盛りをしてきた青年会が、午前零時の瞬間を待ちに待って、叩き出しが始まる。松岡義一は、「石取祭の心意気」について、叩き出しを「桑名っ子の胸に鬱積していたものは鉦鼓となって、全市に爆発する」[7)]と表現している。この日を迎えるために、祭車の手入れなどをし、石取コンクールに向けた鼓鉦の練習をして鼓鉦を奏でる腕を磨き、前日から本格的な祭の準備をして叩き出しを迎える。叩き出しは、その瞬間を待つ青年会のワクワクした感情を誰もが見て感じることができる。鼓鉦を奏でる者にとって、石取祭の始まりを意味する叩き出しは、最大の魅力的瞬間である。

本楽のクライマックスは、渡祭である。渡祭とは、祭車が春日神社の桜門前に進み、青年会が鼓鉦を打ち鳴らして退出するという儀式である。参加する祭車は、昼頃に出発して、15時までに指定された場所に整列する。2019年は39の祭車が参加した。

渡祭の時間は予め決められており、その時間に合わせて各町内会が祭を進行する。そして、渡祭の瞬間、青年会が素晴らしい鼓鉦のパフォーマンスを披露し、祭は最高に盛り上がる。青年会が、自らの感情を爆発させ、燃え尽きる瞬間である。パフォーマンスを披露した後の退場の様子は、サッカー等の試合の後と同様の清々しさを感じさせる。

石取祭の魅力は、各町内でクライマックスの瞬間があり、それを見学者も含めて全員で体験をすることである。石取祭のクライマックスを見ることにより、少年会の会員は多くのことを学ぶことができる。そこには、人間らしさ、連帯感、責任感、達成感等、私達が生きていく上で必要なものがすべて含まれているからである。

石取祭のクライマックスを迎える為には、様々な準備をする必要がある。楽をして、祭のクライマックスを経験することはありえない。祭を盛り上げるためには、全員で力を合わせるこ

とが必要である。連帯感がなければ、祭は成功しない。少年会も、鉦を磨いてその一役を担っている。

祭に向けて準備し、祭のクライマックスを迎えて燃え尽きる大人の姿を見ることにより、子ども達が将来自分もそのような大人になりたいと憧れる。石取祭には、子どもをそのような大人へと導く力がある。青年になったら、石取祭のクライマックスを体験することができる、感情を爆発させて燃え尽きることができるということを知ることは、子どもに未来の楽しさを教え、それが生きる力になる。

7．石取祭の教育的意義

石取祭は、夜中の祭であり、大人の度を越えた飲酒を伴う等、教育的な視点から考えれば、非教育的な祭事と言わざるをえない。しかし、非日常的な祭だからこそ、子ども達に様々な力が育つと考えられる。

(1) 達成感

石取祭は、子ども達が他では経験することができない達成感を感じることができる。まず、石取コンクールである。2019 年はそのパフォーマンスが評価され、西鍋屋町は子供の部の 21 チーム中 5 位を意味する上田染工敢闘賞に輝いた。練習の成果を評価されたことで、コンクールに出場した会員は、頑張って鼓鉦を奏でる練習をして入賞することができたという達成感を得ることができた。更に上位入賞を目指したいという気持ちも育っていく。今回、出場することができなかった会員も、来年度は出場することができるようにと鼓鉦を奏でる技能の向上に余念がない。

石取祭では、スケジュール通りに行動することが求められる。1 回目の「お勝つぁん」から、かなりの距離を歩くことになる。会員の年齢にもよるが、年少の会員には最後まで参加することができただけでも、達成感を味わうことができる。試楽、本楽になると、少年会が鼓鉦を奏でる時間が決まっている。「藤姫会」と「青年会」に鼓鉦の担当を交代するまで頑張ることができれば、自らの役割を全うした充実感を強く感じることができる。

更に、少年会の活動が終了した後も、祭りに参加することができる。祭の終了まで参加することによって、少年会の会員でありながら自分は大人と同じように最後まで参加することができたという優越感を感じることができる。その際、町内から軽食が振る舞われる。子どもにとって、大人と共に軽食を食べること自体、最後まで長時間にわたって祭に参加したご褒美であり、自らの成長の証となる。

(2) 忍耐力（我慢する力）

少年会としての集団行動の為、我が儘は許されず、協調性や我慢する力（感情をコントロールする力）が育つ。特に本楽の「整列に向かう送り」の時間帯、炎天下で鼓鉦を奏で続けることは過酷である。暑さを我慢し、疲れても他の会員と同じように行動しなければならない。鼓鉦を奏で続けると、手のひらに豆ができて痛くなるが、それでも鼓鉦を奏で続けなければなら

ない。通常なら虐待に近い状況かもしれない。しかし、2日間という限られた時間である。大人と同様、少年会の会員もつらいことを我慢するのは、石取祭の魅力に取りつかれているからこそできることである。

但し、少年会の活動は強制的なものではなく、あくまでも会員の自主的なものである。少年会としては、決して会員に無理はさせておらず、途中休憩も帰宅も自由である。特に体調不良の場合は、即座に少年係が救護に当たっている。

(3) コミュニケーション能力及び社会性

少年会の会員は、最初から友達関係ではない。石取祭に参加するために集まってきた仲間である。知らない者同士が、短期間で仲間になることにより、社会性が育つ。

学校や塾、クラブ活動等とは全く違う異年齢集団の中で、少年会の会員はお互いにコミュニケーションを取り合っている。日本で一番やかましい祭りなので、ほとんど会話ができる状態ではない。しかし、太鼓を叩くことができない会員がいたら、誰かが自然と手を添えて一緒に叩いていてくれる場面などから、言葉よりも意味のあるコミュニケーションがあるのではないかと感じた。

町内の子ども中心の少年会の時代は、太鼓を叩くのに並ぶということがなかった。小学生にも満たない幼少期から、少年会で太鼓を叩き鉦を摺っていた。いわゆる阿吽の呼吸で、太鼓のばちを次の子に渡していた。これも、言葉以上のコミュニケーションである。

異年齢の人とコミュニケーションを体験することができるのも、石取祭ならではである。石取祭は、その町の全世代が参加するので、自然と様々な年齢の人とコミュニケーションをとることになる。核家族化が進行し、近隣との関係が疎遠になっている現在、子ども達が様々な年齢の人とコミュニケーションをとる機会は少ない。その点、短期間ではあるが、石取祭に参加することにより様々な人とのコミュニケーションを体験することができる。

(4) 親密な人間関係の構築

日本の社会全体、人間関係が希薄化している今日、石取祭では親密な人間関係を体験することができる。少年会の会員は、町の中高年者から鼓鉦の叩き方を教わって、その技量を上達させる。今の時代、知らない大人から何かを教えてもらう経験はほとんどない。

石取祭の間、町の大人に見守られ、祭車周辺は安全が保障されている。危険な行動や約束違反をしたら中高年者から注意を受けるが、それも人間関係としては大切な経験である。常に大人に見守られている状態で2日間過ごすことにより、石取祭を介して子どもは大きく深い「愛情」を感じることができる。

(5) 自分の役割を理解する

西鍋屋町は、少年会（中学生までの男女）、中青会（中学校卒業以上20歳未満）、青年会（20歳～40歳の男性）、藤姫会（20歳以上の女性）、中老会（41歳～65歳の男性）、大老会（65歳を超えた男性）という組織が作られている。鼓鉦を奏でて祭を盛り上げるのが青年会、藤姫会、中青会と少年会である。祭車の管理・運行及び運営は中老会が担い、大老会と共に祭の指導的

役割を担う。少年会も、事前準備として鉦磨きという役割があり、鼓鉦を奏でる担当時間がある。年齢に応じた役割分担が明確で、自分の年齢相応の役割を果たす。これは、少年会の会員のみならず全員が、人生における自らの位置づけを確認することに繋がる。

本楽においては、40台近い祭車が一斉に整列するため、お互いが競い合う雰囲気がある。大人が不在の時間帯に少年会が鼓鉦を奏で続けることで、西鍋屋町の祭車を華やかに彩ることができるのは、少年会の会員にとってはある種の誇りである。少年会の会員の多くが、「上手く太鼓を叩きたい」と思い一生懸命練習する姿に、西鍋屋町の石取祭を他町より良いものにしていきたいという思いが感じられる。

(6) 危機管理能力

少年会の会員は、熱中症対策として、太鼓を叩いた後、鉦を摺り、水分を補給した後に太鼓の列に並ぶことを遵守した。また、祭車が運行している際、曲がり角を曲がる時の遠心力で、吊り下げている鉦が外に向かい危険な状態になる。その時は、少年会の役員等が鉦を固定してくれる。また、祭車が停止している時は、年少の会員が優先的に鼓鉦を奏でるようにするなど、安全対策を講じている。この体験から、少年会の会員にも、危機管理能力（生きていく上での知恵）が自然と身に付いていく。

おわりに

教育基本法第2条「教育の目標」と題してその5番目に、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛する」ことがあげられている。地域の伝統的な祭事は、まさしくその地域の伝統と文化であり、その祭事を幼少期から体験することにより郷土、更には日本を愛する心も育まれていく。桑名在住の人であっても、祭車のない地域の人にとっては、見学するだけの単なる祭である。しかし、幼少期から石取祭に参加することで、石取祭が好きになり、石取祭がある桑名が好きになる。石取祭を継承していくことは、教育基本法に謳われている精神を実現することに繋がっていく。

新体制の少年会も2年目を迎え、西鍋屋町在住の人からも、町に在住しない少年会の会員及びその保護者に対し、より好意的な雰囲気を感じることができるようになった。単に少年会の会員が多くなり活気ある石取祭というだけでなく、祭の継承に取り組む意識が高まってきたといえる。特に、渡祭において「藤姫会」の後ろで「少年会」も参加する姿は、新しい西鍋屋町の祭の在り方の象徴であると感じた。

2018年から引き続き参加している会員も多く、少年会の結束力が強くなったのを感じる。大人を真似して、祭を盛り上げ、自分達で楽しんでいた。少年会が鼓鉦を奏でる担当時間、子ども達が自然と肩を組んでかけ声をかけている姿から、全身で祭を楽しんでいるのが伝わってきた。

2019年8月2日（金）の「宿作り」や「鉦磨き」、8月5日（月）の「山卸し」も、子ども達が主体的に動けるようにすることを目指し、必要以上の指図を控えたという。単に石取祭に

参加するだけでなく、鼓鉦の練習から始まる長期間に渡る活動だからこそ、深い人間関係を築くことができ、豊富な体験をすることができる。このシステムを継続させることにより、年長の会員が年少の会員を育てていく体制が築かれていくことが期待される。新体制になってから2回目の今回の石取祭では、子ども育成係や少年係の大人が誘導して活動を導くような場面もあったが、回数を重ねることによりその役割を年長の会員が担うようになるであろう。

今、日本の子ども達に求められている非認知能力は、学校の勉強では身に付くようなものではない。脳科学者の茂木健一郎は「人工知能に仕事を奪われたら『ゲーム』をすればいい」[8)]の中で、「脳科学的に言って、『遊び』は学習の機会である。遊ぶことで、新しいスキルや知識が身につき、脳の回路が書き換えられていく」と述べている。代々桑名の人々が、石取祭を楽しみに１年間仕事に学びに励んできた歴史を考えると、桑名の人々にとっては石取祭こそ非認知能力の開発の鍵であったともいえる。

単に、石取祭の担い手不足のための「西鍋屋町石取祭継承者育成事業」ではなく、子ども達の非認知能力の開発のための事業としても発展させていくことが、今後の課題である。

注

１）愛知淑徳大学『教志年報』第５号、2019 年、83-94 頁。

２）祭車の通行することができる道が決められているため、かなりの大廻を余儀なくされる。最短距離では 1.3km 程度である。

３）Time-j.net 世界時計―世界の時間と時差 HP「2018 年夏の最高気温のランキング」https://weather.time-j.net/Summer/Hottest/2018　(2019 年 12 月 1 日取得)。

４）国土交通省　気象庁 HP「桑名　2018 年 8 月 3 日（１時間ごとの値)」http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/view/hourly_a1.php?prec_no=53&block_no=0500&year=2018&month=8&day=3&view=h0 (2019 年 12 月 1 日取得)。

５）国土交通省　気象庁 HP「桑名　2018 年 8 月 5 日（１時間ごとの値)」http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/view/hourly_a1.php?prec_no=53&block_no=0500&year=2018&month=8&day=5&view=h0　(2019 年 12 月 1 日取得)。

６）暑さ指数（WBGT：Wet Bulb Globe Temperature）は、熱中症を予防することを目的とした指標で、単位は気温と同じ摂氏度（℃）で示されるが、その値は気温とは異なる。暑さ指数（WBGT）は人体と外気との熱のやりとり（熱収支）に着目した指標で、人体の熱収支に与える影響の大きい ①湿度、②日射・輻射（ふくしゃ）など周辺の熱環境、③気温の３つを取り入れた指標である。

７）松岡義一「石取祭の心意気」伊勢民族学会編『伊勢民族』第４巻第３号、1958 年、17 頁。

８）『PRESIDENT』2019 年 7 月 19 日号、112 頁。

参考資料

1．桑名市博物館編『平成 28 年度ユネスコ無形文化遺産登録記念特別企画展「祭礼の美～石取祭と祇園祭～」』桑名市博物館、2016 年。
2．松岡義一「石取祭の心意気」伊勢民族学会編『伊勢民族』第 4 巻第 3 号、1958 年、17-18 頁。
3．桑名石取祭保存会公式ホームページ　http://isidori.jp/about.html（2019 年 11 月 1 日入手）。
4．公益財団法人日本体育協会『スポーツ活動中の熱中症予防ガイドブック』2019 年 https://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data/supoken/doc/heatstroke_0531.pdf（2019 年 11 月 1 日入手）。
5．西鍋屋町少年会「2019 年石取祭　西鍋屋町　少年会　活動要項」。
6．西鍋屋町石取祭継承会「岡田文化財団への報告書文案」。